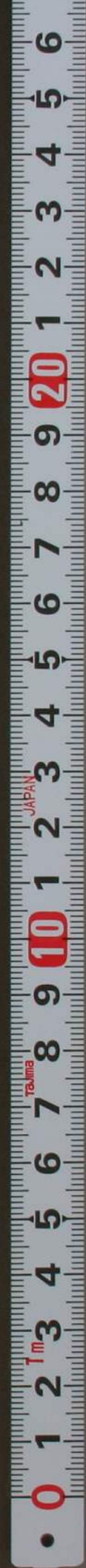


金海一珠
磐水先生著
完

洋学文庫
文庫8
A 45



研
118
97



金海一珠



大觀文庫



右二圖ヨンストンス容斯東私魚譜ニ出ス所ナリ其中上ノ一
圖福路ホロ去力烏模嶮牒列低烏斯ウスト名クルモノハ
我東方陸奥州ウツ儼臺海産スル所ノ金哥キゴナリ此
物我邦海上特奥州金華山下ノ海上前後数十
里ノ際ノミコレヲ出シ他ノ海中産スル所ナシ
故ニ我侯毎歲時ヲ以テ・幕府ニ貢獻シ又兼テ
四方贈遺國産中ノ一物トナス人々コレヲ得珍
奇ノ一奇品トナスモノナリ今此圖ヲ見レハ遠
撤他州亦コレヲ出スノ地アリト見ユ就テ其説
ヲ讀ムニ甚夕略説ニノ産地ノ名モ出サズ故ニ

何レノ地方土産タルヲ辨セズシカレハ其譯
説ヲナセバ左ノ如シ

譯文

此物福尔去力烏模ノ名タル命名ノ義並ニ其出
ス所等ノ事何ノ書某ノ説ニ出ルヤ吾輩未ダコ
レヲ知ルヲナシ古人モ亦コレヲ説載スルモノ
少ナリ然レハ其略説ニ曰此物海岩等ニ附着
スルモノニ非ス且亦游泳行走スルモノトモ見
エス其體肌ハ極テ粗糙ヲナス
嶮牒列低烏斯各ノ書所載此二圖アリ其説ヲ為

ノ曰即此圖ハ吾目撃セル所ヲ具載ス其體ノ一
偏ハ鉦^純乎ニメ猶玫瑰花ヲ剪切メ卷曲セルモノ、
如シ且ソノ所ヨリ一箇軟弱ナル細小片ヲ懸垂
ス此物其臭ハ魚ノ如クセーハ^{海魚ノ香ニ}ス
劣ラス其一端ハ彼ヨリハ薄小ニメ状異ナリ腹
裏藏有諸物ハ某何ト區別メコレヲ分チ稱スヘ
キモノアルヲナシ

按是我金哥ナリ但乾脯ノ物ヲ見タルノ説カ
又其一圖ノモノハ一頭顱ノ如キモノアリ圓メ
且痞癩高低アリテ自ラ展開シ或ハ縮胸ス一體



強厚ニメ多刺ヲ生ズ其下ニ一箇ノ尾ノ如キモ
ノヲ見ハス又其部ノ西側ニ外ニ垂レ懸ルモノ
アリコレ足ト鰭トニ代ルモノニメコレヲ以テ
右往左往ニ身ヲ運轉ス其上ニアルモノハ下ノ
モノヨリハ狭ク漸ク卷縮メ其尖端ヲ止ル又此
處ニ至ルマテ頂部ヨリ一道ノ線^線アリコレ全
身ヲ舒展スルモノナリ其下ニ在ルモノハ幅稍
廣ニ即此モノヲ以テ身ヲ動搖スト見ユルナリ
前ノ第一種ニハ此等ノモノ絶テアルヲナシ此
海族時ニ間々岩礁ニ懸着スルモノヲ見ル尤コ

レヲ緩メテ放下スヘキモノナリト説ケリ

按是異種生海參ナルヘシ

本書五十四葉第二篇魚アルト口ハンジユス

名ノ書第四號ニ出セルモノヲ採録ストアリ

右二種ノ屬類コノ二圖ノ後ニ數品ヲ圖ス寔

ニ是彼所謂形容スベカラハサル物ニメ魚ニモ

植物ニモ屬スベカラサル半動物ナリ

茂質コノ圖ト名トヲ得テ他書ヲ搜索スルニ

福路去力亞ノ名アリ即コレト同物タリ因テ

コレヲ附譯ス



非蒲涅兒ノ書三百七拾號ニ曰福路去力亞ハ海

族庶類中ノ尤形容スベカラサル物ナリ因テ

一ヘ并名スニ屬シテ其中ニ算入ス

生植ノ義無情ノ生モナリト類ハ有情ノ生

海參沙喫海盤俾ノ類ヲ存スナルベシ其形數種一

般ナラズ多品ヲナス尋常ノ品ハ形長クメ圖ク

柔軟ナルカ如クニメ且粗皮ヲ被ル人コレヲ海

濱ニ捕リ獲

按其形狀ヲ説ク所甚疎略稍全哥生海參ニ似

タリ

原本祖より粗

伍乙志三百六十五號曰福路去力亞ハ形容スベ
カヲサル體ヲ為ス海族ナリコレ常ニ岩礁ニ固
著ス肉及臟象モ具有スルナリ然レハコレ亦不
容疑ノ生族ナリ但此物其^居所ヨリ地^他ニ轉動ス
ルヲナキヲ以テソトヘ井タ^レ中ニ屬セシム
コレハ「ハ」ルフ^ト又「ハ」ルフ^トル^ル半^{按是}
植又半動物ノ義ナリ前説ト譯名異ナレ^凡其意
同ジ彼圖コレ等ヲ以テ魚類ニ屬セズ別ニ其種
類ヲ分ツ實ニ精^其形種々一様ナラズ其常品ハ
長ク圓メ軟粗皮ヲ被ルコレヲ打テ潰メ諸般痛
患ヲ為スノ處又腫塊ヲイヌノ上ニ置ケハ極メ



○此本一行あり

テ緩和ヲ為スナリ
按此説亦略セリ金哥^{キンゴ}生海參^{ナマコ}ノ類ヲ説クニ似
タリ
仙臺封内氣仙隱醫相原友直三畏ハ吾郷ノ清菴
先生晩年ノ友タリ三畏翁著述ヲ好ム老ニ至テ
眼疾アリ遂ニ明ヲ失シ故ヲ以テ其著作ノ稿ヲ
脱セサルモノ多シ翁嘗テ金哥ノ精説アリ其考
亦稿中ノ一タリ翁齡古稀ニメ居テ先生ノ隣邑
ニ移シ其族家ニ老ヲ養フ尔後先生ト書信繁シ
小生茂實先生ノ為ニ屢々其寓居ニ往來ス翁一

日我先師ニ其金哥校正ノ事ヲ謀ル先師コレヲ
閱シ校讐論議往復日アリテ參訂成ル茂質為ニ
數回往還遂ニ亦繕寫ノ了ニ與ル寔ニ安永ノ初
年距今三十有餘年前ナリニ子已ニ逝キテ今且
三十年茂質都下ニ客在スルヲ教歲今ニメ偶々
異方ニモ亦此物ノ因説アルヲ見ル其略説二子
ノ考究スル所ニ及バズトイヘ凡コレヲ親リ其
人ニ告サルヲ憾トス又近口蘭山翁ハ此物ヲ以
テ本草從新ノ光參ニ充ツ果メ然ルヤ否ヲ知ラ
ズ其説ニ曰

水

海參 甘鹹温補腎益精壯陽療痿 遼海產者良

閩州紀云閩中海參色獨白類樟以竹簽大如掌
與膠州遠海所出異味亦淡方海上人復有以牛
草偽為之以愚人不識尚也膠州所出生有刺者
北海鹹木中色又黑以滋腎水從其類也

名刺參無刺者名光參

コノ吳儀洛本説ノ如ク無刺者名光參トイヘル
ニ因テ光ルカ然レ凡無刺ノミナラスナマコト
キンコトハ其外形モ異ニ殊ニ其腸ニ至リテ
ハ大ニ差ヘリ奈麻古腹内ノ三條ノ腸ハ所謂古
乃和多ナリ金古ノ腸ハ線ノ如ク腹内ニ充實
色金黃ヲナシ味極テ佳腸ヲ連テテ糞食ヲ蓋奈

茂復按ニコノ
ワタハナマエニ賜
ニ非ス子ニ子ト賜
トハ自ラ別ニ江
ニテハ子ノ塩蔵ノ
ニ貴ベトモ他邦
ニテハ子賜トモ
貴スルト少長
崎ニテハ江戸ノ
「コノワタ」ト稱ス
ル者ヲコノコト
呼スト

乾コトニレ

麻古ト金古ト自ラ同族別種ナルベシ但方俗此
類ヲ以テコト呼フ故ニコニキンヲ冠シメテ種
類ノ名称ヲナスコレ原ト金華海濱ノ方言ナル
ベシ既ニ貝原氏ハ奥州金花山ノ海參黄色ナリ
キンコト云フト海參ノ條下ニ説キ海參ノ一種ト
セリ其原トヲ詳ニセザルノ失ナリ茂實嘗テ謂
ヘラク「コハ此類ノ総名ニ生ナルモノヲ「ナマ
コトイヒ蒸シテ乾スモノヲ「ナリコト呼ビ又「
リコタシコ等ノ名称モアリトスキニコモ腹腸
金黄色ナルユエニ斯ク名ケシト尚項諸書ヲ考

究スルニ和名類聚鈔ニ海鼠和名崔禹錫食經云
似蝮大者也按コノ海鼠今ノ所謂奈麻古ト見ユ其
物ノ當否ハ未タ辨セザレモ今ニ於テナマコトヲ
稱スルニ俗間此字ヲ用フルハ年久キ「之姓昔
ハ「コトノミ呼シト知ナル野千里曰本朝有海鼠
者尚矣古事記曰諸魚奉壯白之中海鼠不白爾云
云又本朝式加熬新云伊里古ト和名鈔ニ見エタ
レハ生ナルハ「コトノミ稱セシト見ユコレハ香
月氏ノ説ニ本邦昔無食生海參煮乾為脯名伊
里古食之コレ左アルベシシカレバ奈麻古ハ生

食スルコトノ出来テ後世ノ名ト知ラル伊里古ハ
尤古ク本朝式神祇部有熬海鼠二斤主計部志摩
云ニ諸國貢之ト記セリトハ余今ニメ始メテコ
ト稱スルノ本據ヲ得タリサテ正シク海鼠ノ名
ハ奈麻古ニアタレルヤヲ知ラズ先輩兩航雜錄
ノ沙喫ノ名ヲナマコニ充ツコレ亦未ハ辨究セ
ル所ナシ按ニ李氏等所謂海參ハ全ク熬海鼠ニ
メ生物ニアラズ其所説ヲ見テ辨ズベシカクノ
如ク「コト」ナフ古名ヲ以テ後來各種ニ命ズレハ
ナマコト「ギンコト」ハ元ト自ラ異ナリ蓋金コハ

他邦ノ産セザル所特リ我東奥牡鹿本吉氣仙三
郡ノ前後海上夥ク産ス東奥地亦コト産ズ
通ル海鼠ヲウタト呼フヨシコレ海水四方コレヲ
奇品トシ募リ得ルモノアリトイヘ其形狀性
味ヨリメ調理ノ法功能主治俗間コノ乾煮其汁ヲ
ト其由ル痘瘡順吉ナリニ於ケルモ辨知セサルモ
ノ多シ唯香川氏ノ説ケル傳聞ノ謬説ヲ知り得
ルノ類ナルベシ今爰ニ茂質往年私録メ藏スル所
ノ相原翁金海參考一編ヲ新ニ繕寫シ右二圖譯
説ト共ニ世ノ傳濟ノ士ニ示サントス是實ニ海

内未だ詳充セサル所ノ一奇品先師等ノ用心博
物ノ衷情遍クコレヲ天下ニ公ケニシ人々其功
用ヲ辨識セシムルノ寸志ヲ呈セントメナリ

文化七年庚午秋 僊垣 玄澤大槻 茂實述

○金哥 金海參一本堂 藻撰

金海參ハ陸奥州金華山下東北數百里ノ間
天平寶字年中以前ヨ海底ニ産ズ其他ノ海ニハ
迄今以六町為一里 生ズルヲナシ實ニ是一奇品ナリ

文彦云古小田郡ハ今ノ遠田郡ノ傍地ニシテ今其金ヲ出シ遺地ヲ黃金道トイヒテ存セリ金華山ノ名ニ據リ俗僧ノ作爲セル所ナリ

友直云香川氏葉陸奥州金華山下地中出ニ種海參俗稱金海參色黃黑狀稱扁圓其腹有字及腸味異于他所者世間大珍貴之云者蓋甚矣金華山嶋中無地且此物非池中之所産其形

金華山ハ牝鹿郡ニ屬ス陸地ヨリ遙ニ隔リタル海中ノ小島ナリ一名陸奥山ト云フ今ノ牝鹿ノ地古ハ小田郡ニメ此島モ當時小田ニ屬ス後世小田ヲ廢メ牝鹿トス

聖武帝ノ御宇日本始テ黃金ヲ出セシハコノ金華山ナリ大伴家持美知能久夜麻尔金花佐久ト詠セシヨリ金華山トイフ

此島ノ石岩ノ間皆黃金色ナリ其精氣海底ニ沉
三金海參ヲ産ズト見ユ金氣ヨリ生ズルヲ以テ
土名金海參ト稱ス他邦ノ海コレヲ出スヲ聞カ

如土氏非扁圓
腸中無子是
見乾金海參
為他物所壓
形為扁圓腸
碎似子而作此
臆說蓋傳聞
之失也

形狀 カラスウリ 土氏ノ如クニメ長四五寸許週六七寸其
色黑或ハ黒ク微紅ヲ帯ヒ黒斑アル有リ耳目鼻
鱗鱗骨ナシ軟滑ナルヲ海參ノ如クナレハ瘡癩
ナシ唯口ノミアリ下竅アルヲ見ズ腹面ニ粟粒
ヲ並べタル如キモノ首ヨリ尾ニ至ルマテ三條
アリ一道幅一分餘アリ其一條ノ間七八分ハ
隔ツコレニテ岩ニ取リ付キ又滑走少シ身ヲ展
縮メ手足ノ用ヲ為スガ如シ水底石岩ノ間ニ在
テ天氣美好ノ日口より一物ヲ吐出ス其形絹絲

ヲ聚メテ作レル鹽粟花ノ如シ其色黃青凌黒等
アリテ花ノ開ケルガ如シ漁人コレヲキンコ花
咲クトイフ物ニ觸レハ乍ナ口中ニ縮ミ入りテ見
エサルナリ肉厚サ三四分餘腸ハ線ノ如ク腹内
ニ滿チ空鱗ナシ黄色アリ綠色アリ黃腸ノモノ
ヲ上品トス綠腸ノモノハ味美ナラズ腹内腸ノ
外別物ナシ潮水ヲ呑ムノ外他物ヲ食ハズ腹内
ニ子ヲ懷クヲ見ズ子ハ梅實ノ大サニシテ水底
石岩ノ間ニ在テ生長ス此物夏秋ハ海底藻草ノ
間ニアリ冬春ハ水底石岩沙地へモ出ツルナリ

捕漁 冬ヨリ初春ノ間コレヲ漁ス専ラ小寒大
寒三十日ノ間ニ捕ルナリ云コノ候ニ獲ルヲ以
テ佳品トシ稱美ス立春後ニ捕リタルハ性味美
ナラズ漁人コレヲ取ルニ諸法アリ網ヲ用ルモ
ノアリ或ハ鉄ノ鈎ヲ用ヒ又ハ四五寸許リノ錐
ノ如ク作りタルモノニ長キ柄ヲ施セルモノヲ以
テ刺シテモ捕ルナリ或海參ヲ捕ル繩袋ノ内ニ
雜リ入ルヲ取ルトモアリ
調理 水ニ煮テ後醬油ニテ煮食フ味佳美ナリ
或曰生ニテ切り和醋食亦佳

此物生海參ト同品トスルモノアリトイヘ凡
形ハ右ニ説ケルカ如ク氣味亦大ニ異ナリ一
類別種トイフベシ金海參ハ黄金ノ精氣ヲ受
テ生ズ故ニ性功宜ニ適シ諸病ニ禁セズ海參
ハ生ニテ食ヘバ冷痰ニ害アリ其煮熟ストイ
ヘ凡堅硬ニメ消化シ難シ脾胃虛弱ノ人食メ
害アリ但海參ニ造リ食ヘバ性味功能却テ大
ニ良ナリ即所謂李時珍食物本草海參註補元
氣滋益五臟六腑云三焦火熱云々○崔禹錫曰
補腎氣黃疸瘦其腸尤療痔○謝肇淛五雜俎

曰其性温補足敵_二人參_一故曰海參_二遼東海濱有之_一
 一名海男子○友直曰金海參_二煮乾者功能悉同_一
 于海參而迥出其上遐邇通試知而所以珍奇也
 造乾金海參法 小寒大寒三十日ノ内捕リタル
 者ヲ水ニテ煮竹筴ニ串キ風日ノ當ル所ニ懸テ
 コレヲ乾シ真黒色ト変シ堅クナリタルヲ度ト
 ナシテ收貯生ノ時トハ甚タ形状ヲ異ニス
 煮法 此ヲ煮ルニ法アリ能熟煮セサレバ堅軟
 食フニ堪ズ亦味モ不美先_レ水ニテ煮ル_レ數沸而
 后_レ澆醬汁ヲ取リタル_レ未_レ醬渣三合程ニ水三升ヲ

入_レ煮熟スル_レ二斗時許乃チ取_リ出シ好ニ從
 テ調理スベシ柔脆ニメ佳味甚タ言フベカラス
 茂質_二按ニ煮汁ノ分量アリテ物教ヲ闕ク意フニ
 十箇前後_一煮ルベシ或傳米泔汁煮熟亦極軟又稻
 葉_二加ヘ煮_レス_一柔軟ヲナス
 東奥氣仙 高田隱醫相原友直三畏 述

○無刺參拙考

古語ニ讀_マ未_レ曾_レ見_ル之書_ニ歷_テ未_レ曾_レ到_ル之山水_ニ如_キ獲_ル至_レ寶_ニ
嘗_キ異_ニ味_一一段_ノ奇_ニ快_ニ難_ク以_テ諸_人也_トイ_{ヘル}ハ_宜ナ_リ
余_{壬午}ノ_{初夏}ヲ_以テ_{奥中}ニ_游ヒ_{其勝境}ヲ_探討_ス
ス_奥ハ_{偏僻}ノ_地ト_イヘ_凡山_水花_木秀_美ニ_メ到_ル
ルト_コロ_尽ク_{奇景}目_ヲ悦_シメ_神ヲ_快ク_スル_ト
其_意實_ニ至_レ寶_ヲ得_ルモノ_、如_シ又_{仙臺}城_下ニ_到
リ_テ門_人某_カ家_ニ逗_{マル}ト_數日_廣ク_{其地}遠_近
ノ_{產物}ヲ_聚メ_鑒ミ_テ風_土地_氣ノ_異同_ヲ領_識セ_シ
ン_トヲ_欲ス_然レ_凡其_物品_一モ_吾カ_都下_ト同_ジ

カラ_ザル_トナ_シ只_一箇_ノ未_タ曾_テ見_カル_所ノ_品アリ_テ之_ヲ嘗_ムル_トヲ_得タル_ハ他_物ニ_{アラ}
ズ_我倭_今ニ_至ル_マテ_ハ只_得テ_乾脯_ニ製_シタル_{モノ}、_ミ吃_シ来_{レル}キ_シコ_ノ生_鮮ナル_{モノ}ナ_リ
一日_某此_物ヲ_調シ_羹ト_ナシ_テ饌_ニ供_シ云_フ
是_所謂_生キ_ニコ_ナリ_ト余_其喜_ニ夕_ヘス_即千_箸
ヲ_把テ_之ヲ_摘ミ_諦視_スル_ニ一_片厚_サ五_分強_弱
ニ_切リ_テ其_肉ノ_厚サ_ハ四_寸許_腸ヲ_連子_テ之_ヲ
煮_ル之_ヲ吃_スル_ニ脆_軟ニ_メ氣_味沙_啜ニ_似テ_更
ニ_一種_ノ淡_クメ_美ナル_ヲ覺_ユ其_腸ノ_味肉_ニ比

スレハ尤濃厚ニメ、鰾魚腸ニ類ス、シカレハ敢テ
貧食ヲ事トセス先其生ナルモノヲ看シテ要
スルニ乃チ數個ノ面前ニ列セリ大サ鴛鴦ノ如
ク又更ニ大ナルアリ皆楕圓ニメ粘滑ニ色ハ黑
白赭灰相間シ又綠色ヲ帶ビタルモアリ、渾然ト
メ沙喫ト^金ク眼鼻髻骨等ナシ只渾身一點ノ痞
癩ナキハ沙喫ト^果ナリ沙喫ハ即チマコナリ雨航
雜錄曰沙喫塊然一物如牛馬腸藏頭長五六寸無
目無皮但能蠕動觸之則縮小如桃栗徐復擁腫土
人以沙盆揉去其涎腥雜五辣煮之脆美為上味是

ナリサテキンコハ小孔アリテ其孔ヨリ乱絲ノ
如キモノヲ露シ出シタルハ即チ先ノ腸ナリ其
色黄ナルアリ又綠色ナルアリ水中ニアレバ多
ク此絲腸ヲ吐出^ニ物ニ觸レバ即孔中ニ縮入ス
ルヨシナリ翻シテ其裏ニ見ルニ大サ鯉魚子ノ
如クナル肉粒密貼メ豎ニ三道ヲ為ス之ヲ以テ
岩礁沙渚ニ毒蛇膠着ス思フニコレ尚蛤^ナノ樹
枝葉上ヲ度ルニ等シカルベシト知ラル金花山
下ノ海中ニテ捕獲スル所ナリト云フ既ニメ其
煮法ヲ叩クニ其法甚麼ノ難處ナリ^ハ只之ヲ切り片

ニシ又丸ノマ、ニテモ久ク煮柔ラクルヲ佳ト
ス。久シカラサレハ堅クメロニ可ナラズ大抵水
ヲ以テ煮ルヲ三時半許ニテ取出シ後再ニ煮テ
味ヲ添フルニ酒醬ヲ以テス沙喫ハ生ニテ啖フ
ニ其腸ヲ去ソレモ此物ハ其賞スル所腸ヲ併セ
テ煮ルヲ異ニスト余便モ某ニ語云イハク既ニ
未曾歷ノ山水ヲ歷テ至寶ヲ得ルカ如ク未ニ更
ニ嘗メサル所ノ異味ヲ嘗ルヲ得タルハ未曾
見ノ書ヲ讀ムカ如シ快事ト云フベシト

按ニキンコハ即沙喫ノ一種ニモ東奥金華山

海ノ物ヲ好品トス先年佐渡ヨリ肺トナシタ
ル物ヲ送りタルヲアリシ其他ノ諸國ニ出ス
ルヲ聞カス鑛銛ノ氣アル所在ニノミ産ズル
モ亦奇ト謂フベシ蝦夷海中ニモ必此物ヲ生
スベシト思ハル此物未ニ其漢名ヲ審ニセズ
偶東圃王子律ガ藥性纂要ヲ閱スルニ海參出
海中長岐島夷人稱海蛆蟬史ノ海蛆ハ有黑白
二色長二三寸大寸許周身有内刺而黑者為佳
一種無肉刺色帶白名為肥皂參次之トアルヲ
以テコレ即キンコナルベシト更ニ坐右一

二ノ書ヲ被^被テコレヲ閱スルニ鄆山朱氏ノ偶
記ニ海參長三四寸、圓如鷄卵、大有肉、則日本關
東高麗俱同、山東所出小而黑、俱名為陸參^ス之名
刺參^{刺參}、^{刺參}作^{刺參}、^{刺參}邊ニ温州寧波白州亦出、有無刺而黑
白劈開者為瓜皮參、色味俱不及刺參、出咬趾瓊
州等處、一斤、刺參可買十斤、瓜皮參トアリ唯其
產所俱ニ温燠ノ地ナルヲ異ナリトスルヲ以
テ稍疑フトコロナリ本草從新ニ海參產遠海
者良、有刺者名刺參、無刺者名光參トアルモ亦
此物ナルベシ終^終仁月池先生ノ物類抄記ヲ讀

ムニ藥性纂要ノ肥皂參ハ琉球海參一名ヤマ
ヤマイリコ又カナヤママイリコト稱スル物ナ
リ即チ曉ル彼ハ寒地ニ産シ此ハ温處ニ産ズ
其異ナル所アルヲ余コ、ニキンコノ名ヲ
得ニカ為ニ却テ此品アルヲ遺忘セリ此ノ
ヤヘヤママイリコハ薩州ヨリ公ニ獻スル所
ノ品ニメ又一種ノ沙啜ナリ其肺トナシタル
者ハ偶々彼藩ヨリ得ルヲアレヒ己ニ乾肺セ
ル故ニ其色澤分明ナラス大サハキンコノ肺
ヨリモ大ニメ海參ニ比スレバ刺無クメ味薄

ク肉硬ク酷タキニコニ似タリ

按中山傳信録ニ八重山一名北木山土名尋
師加紀又名爺馬在太平山西南四十里去中山
二千四百里出麻布棉布海參即此也又周亮
工か閩小紀ニ閩中海參色獨白類樽以竹簽大
如掌與膠州遼海所出異味亦澹劣トアル亦此
物ニテ憾ム所ハ其生ナル者ヲ見ルニ縁ナシ
是ヲ以テ之ヲ顧ミレハキンコモ亦瓜皮參ノ
一種ニメ寒地ニ産スル者ナルベシ既ニ海參
ノ日本遼海ニ産スルモノヲ賞スルカ故ニキ

ニコモ亦冷地ノ者ハ味ノ優レルナルベシ沙

巽寧波沙蒜兩航土笋閩小泥蟬史ハナマコ海

男子姐雜海蛆ハイリコ肥皂參瓜皮參充參ハ

ヤヘヤマイリコニメキシコハ瓜皮參ノ一種

ノ寒地ノ海ニ産スルモノト知ルベシ西洋ノ

説ノ如キハ未タコレヲ閱シ譯スルニ遑ナシ

コレヲ他日ニ俟ツト云

甲申竹逐日

錫蘭拙者漫記

按ニ故月池先生藥性纂要ノ肥皂參ヲ八重山

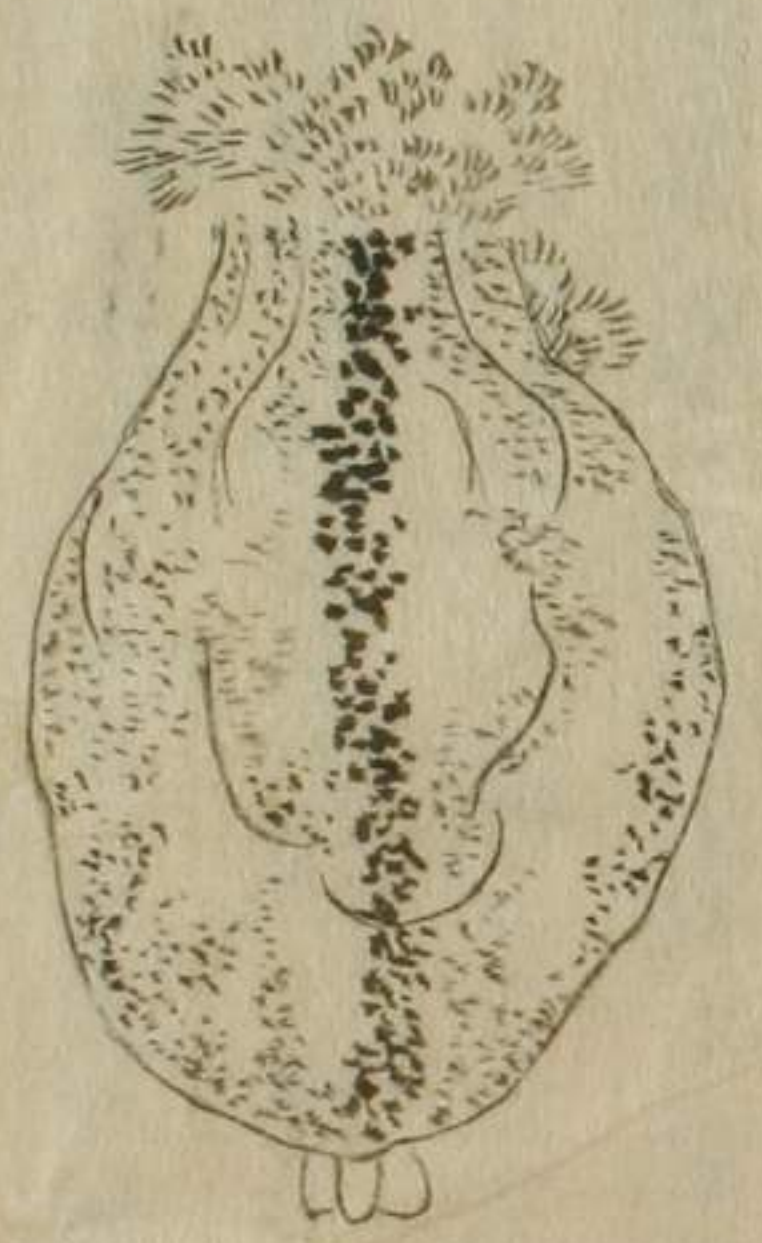
イリコニ充ツルモノ大ニ見ル所アリ服従ス
ルニ堪ヘタリ其令孫錫蘭君今鄞山朱氏偶記
ノ瓜皮參本草後新ノ光參小野蘭山嘗テ此名
ヲキシコニ充テタ
ヨリ無刺者トアルノ三名共ニヤヘヤマイリコ
ト定ムルモノ亦一阜見トイフベシ余亦既ニ
ヤヘヤマイリコヲ藏メ今ニメ始テ漢人所謂
三名此物タルヲ必スセリトイフヲ發明セ
リ肥自トイヒ瓜皮トイヒ光トイフ其状スル
所全ノ乾脯ノヤヘヤマイリコタルベシ但漢
外皮ノ刺アルト刺無キトヲ以テコレヲ辨別

スルノミニニメ別ニ其腹内藏有ノ物云々ノ
ヲ弁セズ凡ソナマコノ類ハ腹内ニ所謂コ
タアリ漁人コレト細沙ノ混交スルモノヲ除
キ去リ皮肉ノニ乾脯トナス或產地ニヨリテ
ハコノワタヲ鱧鱓ニ作り人ノ甜物ニ供スキ
ンコハコレト大ニ異ナリ前説ニモ言ハレシ
如ク此物ハ腹内ニ絲腸アリテ生活ノ時ハ外
孔ヨリコレヲ出入ス邦人ノ食料ニ供スルハ
此黄色絲腸ノ甘美ナルヲ殊ニ愛スルヲニメ
ナマコトハ大ニ異ナリ唯皮肉ノ味ハナマコ

ト類似タル所アルノミ其種族ハ同類トイフ
 ベシコノ類ヲ西洋ニテハ「ソ」ヘ井「ユ」ス和蘭
 「ル」フ「キ」ル「ト」稱ス前譯ヲ併セ見ルベシ彼
 云フ「ホル」キ「リ」ウ「ム」ト呼ブモノハ果メキンコ
 ノ乾肺ノモノタルベシ漢名ノ如キハ未々知
 ラズ別ニ此物ノ名呼ハアルベカラサルカ我
 ヨリキンコヲ彼ニ送ル「ヲ」聞カサレバナリ
 其年仲夏 月測老人金海一珠ノ後ニ附記ス

ス...

キンコ 乾^{ホシ}脂^ア品^クノ圖



海參

海參ハ所謂剪^ハ海^シ參^コナリナマコハ
 キンコトハ紛^ルルベキヤウナシ所在
 産ノ人ノ知ル所イリコノ生^ナルナリ

生ノ物ハ記中ニ説ケルカ如ク
 稍^シ形^ノ狀^ヲ異^{ニス}、固^トヨリ
 ナマコトハ自^ラ異^{ナリ}



金海珠一巻

磐水大槻茂實著

跋

家藏蘭畹摘芳稿本全部四十卷王父磐水君の撰き所
此中三巻は往年刊行せり 明の初年家兄修二官が携ひておこし
 博地句の納めりし也四十巻の内より其第三巻やうん
 の巻を遺り嘗て先人の託を聞けり往年神田須田
 町の醫馬三好山順山順の家の一巻を借したるやうに覺えて
 遂に失へりといふれども山順の孫に三代におのりし
 こと山順の孫に其家の歴史を捜さるるもやまらざるし
 と思ふは其のありしに已みぬ也 明治十年に至りて
 伊藤圭介翁より一冊の古本を寄せよて曰く此冊は先年

長谷川幸仙雙
水芝草高足

紙屑店より古書附本を購ひ置りしものの中あり
一あり尊家の藏本抄寫したるものと見ゆむを鑒定して
と云いおたきもやかてその書紙見ると外題は「蘭畹摘芳
神」とありて表紙は披けを「蘭畹摘芳附録卷之二」
先を譯考は「蘭畹摘芳附録卷之二」
紙の背に「然しありし」
と掲げ即ち卷キニの夜あり余が家におく書の癖本た
と見えぬと家におく王又く著せる仙臺まへ本の池と
題せる刊本の小冊子あり紙數僅に四葉ありて全文は本の
書の大要を抄出せしものありて産地形状調剤の事を抄

復軒稿箋

せりその本の文は此品愚老が御國名産十ヶ條書
ノ諸説ヲ編集して金海一珠と題せん小冊アリ評其中心載
たり今其畧ヲ抄書して本ニ上ヤ贈遺え諸君附呈す
あり此もその書の原本に即ちの書ありてキニを贈えん
の附録見せんと別な様ものせしき彼の蘭畹摘芳
本書四十卷の内キニの事々しまし〜彼の欠け〜一
卷まであるがれどもその書の久しく家にお失せしを再
かきより安んせしれ〜奇遇とや言えま〜依りて二卷
抄寫せし一枚にて原書に初に還璧しやかてその寫本
一卷・家にお藏しせしを抄者におくけ〜又その二卷を装し

て再博物局の^{文庫}的^{大正}聊彼の欠けを補む人の心
大正十四年辛巳五月二十六日不肖文彦識

大觀文庫藏

復軒稿箋

50258	
原簿番	
50257	
假書名	
金海一珠	
著者名	大板澤
發行期	
年	
冊數	卷數
冊	卷
部	門
種別	字
備考	

世冊 金海一珠
 先年紙屑店
 此書者 雜不 類冊
 其 冊
 見 本 寫 記
 從 卷 尾
 一 氣



